

創世記とミルトン「楽園喪失」にみる アダムとイヴ像

齊 藤 恵 子

本稿は、二〇〇三年七月十九日、日本比較文学会東京支部の研究会における口頭発表に加筆修正したものである。第一部「二つの創造物語」と、第二部「ミルトン『楽園喪失』におけるアダムとイヴ像」から成り、今号と次号とに分載する。英文レジюмеは次号に掲載する。

はじめに

人祖アダムの妻イヴという女性は、西洋文明の女性なる概念の核心にあるといわれる。⁽¹⁾ 本来、イヴとは、「生きとし生けるものの母」⁽²⁾ という意味であり、肯定的かつ聖なるイメージをもつが、同時に、呪いと災難の源である女性、男性に比較して劣り、人間を罪と死に定めた女性であるというイメージとも分かち難く結びついている。新約聖書の第一テモテへの書簡(Ⅱ章13～14節)で、「アダムがさきに造られ、それからエバが造られた」「アダムは惑わされなかったが、女は惑わされて、あやまちを犯した」⁽³⁾ と評されている女性観である。

遠藤周作は、西洋人の心の中に女の三つの原型があるという。精神的な清らかさ、純潔と母性の原型として、宗教的な理想像としての聖母マリア、女性だけのもつ「悪」の原型、闇の女性、罪への誘いとしてのイヴ、それに肉体的、芸術の美の体現者ヴィナスである。⁽⁴⁾

伝統的なキリスト教会の教えでは、原初の罪が女(イヴ)で始まったので、救いも女(マリア)から始まるとされている。そのために、キリストの母マリアは、無原罪であったという信仰箇条を持っている教派もある。⁽⁵⁾ どこに起源をもつかをはっきり説明できなくても、「女は男のあばら骨から造られたのだから、男より劣った存在」だという考えが漠然と頭の中にある人は、日本人にも少なからずあるのではないだろうか。

悪への誘いとなったイヴを描いている作品で最もよく知られているのは、十七世紀のイギリス清教徒詩人ジョン・ミルトン(1608～1674)の長大な叙事詩「楽園喪失」Paradise Lostである。この長詩の中心思想は、アダムとイヴの墮罪であるが、ミルトンの男女観も、第一テモテへの書簡にみられるものと同一線上にある。

ところで、ミルトンの「楽園喪失」が材を得た旧約聖書で、アダムとイヴはどのように描かれているのであろうか。天地創造と人間創造の物語は、旧約聖書の第一の書である創世記の第一章と第二章とにある。人間の創造物語は二つあり、しかもその内容が異なっており、相互に矛盾した箇所もある。

宇宙、この世界はどのようにしてできたか、人間はどこから来て、どこへ行くのか、人間は何のために生れたか。これらは、古くから人間が問い続けてきた問題である。創世記には、旧約聖書を著した人々、つまり古代イスラエルの人々の抱いた宇宙観、創造観、人間観が示されている。それはユダヤ教の、ひいてはそのユダヤ教の伝統を受け継いだキリスト教の根幹を形造っている。

聖書（旧約聖書と新約聖書）は、キリスト教の正典とされる。その意味では宗教書であるが、神の靈感によって書かれたものだから、一言一句も批判したり、疑ったりしてはならないというものではない。異なる二つの創造物語をどのように解釈し、読み解き、そこからどのようなメッセージを読みとるか。その整理、分析、解釈の過程で、聖書がどのような書物で、どのように成立したか、どのように読めばよいかのかが明らかになってくる。

創世記の二つの創造物語の男女像をはっきりとさせ、ミルトンのアダムとイヴ像と比較すること、その変容がどのような背景をもっているかを考察することが、本稿の目的である。

第一部 二つの創造物語

一、第一の創造物語

最初の人間の男女のペアの起源については、創世記の第一章から第二章にかけて、二つの説が書かれている。この二つの記述の矛盾は、フレイザーの指摘をまつまでもなく、⁽⁶⁾ 注意深い読者なら、見逃すことがあり得ないほどに明白である。

第一創造物語は、聖書学的には「祭司資料 (P資料)」とよばれるもの⁽⁷⁾ に基くもので、第一章1節～第二章4節前半までに書かれている。第二創造物語は、「ヤハウエ資料 (J資料)」⁽⁸⁾ に基いて、第二章4節後半～第三章24節に書かれている。

第一創造物語では、まず宇宙の創造が語られる。闇と混沌であったこの世界が、宇宙以前に存在する唯一全能の神の「ことば」によって、光と闇とに分けられる。続いて六日にわたって、秩序正しく万物を創造された様子が、まことに整然と書かれている。最後の日に人間が万物の長として創造され、支配権を与えられた。七日目は、万物が完成されて、安息のために、神はこれを「祝福され、聖別された。」とある。休日は聖なる日である。⁽⁹⁾

第一創造物語が、いかに秩序正しく、かつ荘重に書かれているか、次に全文を引用して、分析したい。

創世記⁽¹⁰⁾

天地の創造

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。

筆者注

第一日目

第一の秩序 光

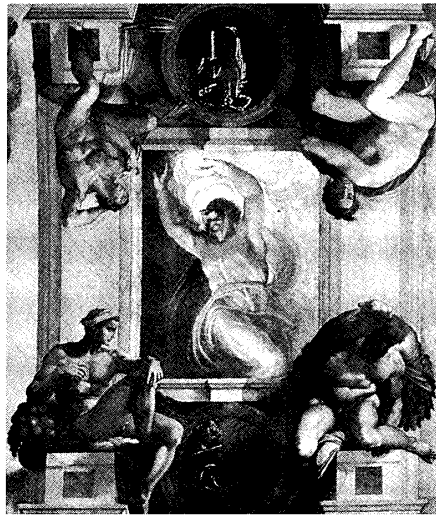


図1 ミケランジェロ「光と闇の創造」(1511-12年)
システイーナ礼拝堂天井画

「光あれ。」

こうして光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

神は言われた。

「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」

神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。

神は言われた。

「天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。」

そのようになった。神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。

「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。」

そのようになった。地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた。

夕べがあり、朝があった。第三の日である。

神は言われた。

「天の大空に光るものがあって、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。天の大空に光る物があって、地を照らせ。」

そのようになった。神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。神はそれらを

第二日目

第二の秩序 水

第三日目

第三の秩序 地

第四日目

光の秩序

天の大空に置いて、地を照らさせ、昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせられた。神はこれを見て良しとされた。夕べがあり、朝があった。第四の日である。

神は言われた。

「生き物が水の中に群がれ。鳥は地の上、天の大空の面を飛べ。」

神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また、翼ある鳥をそれぞれに創造された。神はこれを見て、良しとされた。神はそれらのものを祝福して言われた。

「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。」

夕べがあり、朝があった。第五の日である。

神は言われた。

「地はそれぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ。」

そのようになった。神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの土を這うものを造られた。神はこれを見て良しとされた。神は言われた。

「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

神は御自分にかたどって人を創造された。

神にかたどって創造された。

男と女に創造された。

神は彼らを祝福して言われた。

「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

神は言われた。

「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」

そのようになった。神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。

天地万物は完成された。第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なされた。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なされたので、第七の日を

第五日目

水の秩序

第六日目

地の秩序

第七日目

万物の完成
休息の祝日

神は祝福し、聖別された。

これが天地創造の由来である。(創世記第一章1節-第二章1~4節前半)

七日にわたって万物が創造されたのだが、右欄に注として記したとおり、後半の三日は前半の三日の、光と水と地の秩序の反復、深化として、対になっており、七日目が完成、安息の日。すなわち三プラス三プラス一の七日間である。聖書にあって、一・三・七・十二・十四・四十は、深い意味をもった聖なる数字であり、この七日間の創造も、全能の神の業として、神学的な意義をこめて書かれているとみることができる。⁽¹¹⁾

さて、人間が創造された第六の日の記述を詳しくみてみよう。

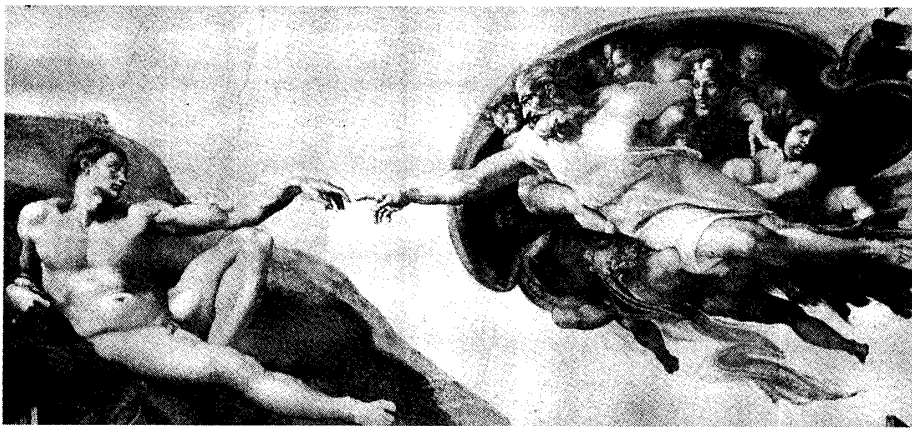


図2 ミケランジェロ「アダム創造」(1510年) システイーナ礼拝堂天井画

神は言われた。

「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

神は御自分にかたどって人を創造された。

神にかたどって創造された。

男と女に創造された。

この創造の特徴は、第一に、神が魔法、呪術あるいは力によって創造したのではなく、単なる偶然によるのでもなく、神の「ことば」によっていることである。人間がはっきりとした目的をもって造られた。また、「我々⁽¹²⁾にかたどり、我々に似せて」とは、つまり、「海の魚、家畜、地の獣、地を這うもの」ではなく、人間のみが、神の属性を受け継ぎ、自分の人格と意志をもち、それに従って行動することが許されているということである。人間は神にかわってこの宇宙をおさめて支配する使命を託されているのである。

第二に神は人間を「男と女に創造された」ということである。これは人間が両性具有であったということではない。人間が、男性と女性という性別をもったのが、同じ時であるとい

う意味である。同時であるから優劣もない。第一テモテへの書簡の「アダムがさきに造られ、それからエバが造られた」という言葉とも明らかに矛盾している。ここには、女性があとから造られたことを裏付ける表現は一切ない。神のかたちは、男性にも女性にも人格として存在しているのである。

神は自分にかたどって、人間を男性と女性とに創造し、祝福して「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。」と言っている。男女が共同して、この世における生命を継承していくことを望んでいるが、「地に満ちて地を従わせよ。」とは、無制限に地に溢れるほどの繁殖を奨励しているのではない。地上の食糧、生きて行く環境が、人間の幸福な生存を保証する範囲内で、生命を継承せよと命じられているのである。⁽¹³⁾

第一創造物語で、神が、自分の創造をみて、それを「良しとされた。」ことは、第二日、第三日、第四日、第五日と、毎回繰返され、第六の日に、「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」と強調された表現で、神の満足感が表明されている。これはきわめて注目すべきことである。地球環境を守ることは、聖書的メッセージである。もし、現在の地球上の状態が、自然環境上も、食糧の配分の不適切さから生じる飢餓や貧困の問題でも、「極めて良かった」状態からはなれているのであれば、神に託された使命を人間が果たさなかったことを意味している。地球が、創造の際の神の秩序にそむいて、こわれている状態にあるなら、なおるものなのであり、なおす能力も人間には与えられているのである。

二、第二の創造物語

第二の創造物語は、第一創造物語のすぐあとに、すなわち、第二章4節後半から語られている。主なる神が地と天を造られたとき、地上は乾いた状態で、木も草も生えていなかった。土を耕す人もいなかった。そのうちに水が地下から湧き出てきて、土の全表面を潤した。そこで「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」主なる神は、それから東の方にエデンの園を造って、そこに人を連れて来た。この園には、食べるにふさわしいあらゆる木を生えいさせたが、園の中央に、命の木と善悪の木を生えいさせ、エデンの園の地を耕し、守るよう言われたあとで、人に命じて

「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」

（創世記第二章16～17節）

と言われた。この時、人はまだ一人で、伴侶はいなかった。

このように、第一創造物語とは全く違う順序、違った状態である天地創造と、初めの人の

創造の話が、前の話など全く知らないとでも言いたげな様子で、何の説明も、解説もなく、引き続いて語られる。しかもその語り口も、第一創造物語とは異なって、民話風、おとぎ話のような趣があり、素朴でありながら、人の心を惹きつけるものがある。神も、擬人法で表されている。土くれをひねって、人の形になし、その鼻に息を吹き込んで、生命ある者にしたとは、何と親しみ深い話ではないか。古代の人々は、人間が死ぬと呼吸をしなくなるのを観察していて、息を与える存在を造り主としたのであろう。

このように、全く異なった二つの創造物語が並べられていることは、ある意味で読者を困惑させる。しかし、これは、聖書が、終始一貫して疑うことのできない普遍的な真理とか、人間が従うべき、絶対的な行動の規範を与えているのではないことを表してもいる。私たちは、主体的に聖書を読み、判断し、そこから一貫した意味やメッセージをくみとる自由と、責任をもっていることを自覚させられるのである。

聖書は、具体的な状況や時代の中から生まれてきた。複数の錯綜した資料があり、長い間の伝承の過程で変容もし、また編集の作業を経ることで、取捨選択されたことにも思いを及ぼさなくてはならない。

第二創造物語に話をもどすと、人類最初の男性であるアダムは、独りであった。主なる神は、あらゆる家畜、空の鳥、あらゆる獣を形造って、アダムのところへ来て、名を付けさせたが、いずれも「彼に合う助ける者」とはならなかった。

主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。

人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った。

「ついに、これこそ

わたしの骨の骨

わたしの肉の肉。

これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう

まさに男（イシュ）から取られたものだから。」

こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。

人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりしなかった。

（創世記第二章21～25節）

この箇所が、イヴの「あばら骨のレディ」とよばれる由来である。男のあばら骨から、彼のあとに、彼のために造られたイヴは、当然、アダムに従属する存在であるという解釈を生み出してきた。

先に造られた者と、後から造られた者のどちらがすぐれているかは、一概には決められな

い。一番大切なものこそ最後にくることがあるからである。現に、第一創造物語で、人間はすべての生き者の最後に創造されている。

次に、「彼に合う助ける者」の意味するところを考えよう。「助ける者」というと、まず英語の helper⁽¹⁴⁾ が頭に浮かぶ。主なる人を助ける、補助的な役割をもつ存在と思いがちであるが、「彼に合う助ける者」の原語（ヘブライ語）エゼル・ケネグドーは、相対して向き合うパートナーという意味合いが強いということである。⁽¹⁵⁾

第三に、第二創造物語でも、創造という仕事は、神のみがなし得る業で、人間は一切関与していないことを読み取らなければならない。主なる神が、男から抜き取ったあばら骨から女性を造っている間中、男性は深い眠りに落とされていた。眠りを与えたのは神である。男性は、創造の業に関与しないのはもちろんのこと、創造の業を見ることも許されていない。生命を創造する神秘は、神だけが握っているのである。

男のところへ、主なる神が女を連れてきた時、男は「ついに、これこそわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。」と言うが、人間とは、イシュとイシャーがあって、はじめて完全になるもの、たがいに助け合わなくては生きられないということである。

「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。」結婚式で読まれることのある箇所である。人間は、本来一体であったのだが、男と女とに分けられたという考えがギリシャ思想にあって、半身であった男女が相合って、伴侶（ベター・ハーフ）になるという連想からも、結婚に際して引用されるのであろう。アダムとイヴに続く話が、カインとアベルの話、つまり兄弟の物語であることを考えると、聖書は、人間の基本的な結びつきを、男女、夫婦だと考えていることが明瞭となる。

蛇の誘惑

主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。

「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」

女は蛇に答えた。

「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」

蛇は女に言った。

「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存知なのだ。」

女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。二人の目は開け、自分たちが裸であるこ

とを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。
(創世記第三章1～7節)

ここで蛇が、被造物の中で最も賢いものとされている。古来、蛇は、占い、まじない、魔法と結びつけて考えられ、また脱皮して新しい生命を得ていくので、多産、生殖力崇拝の象徴とも思われていた。⁽¹⁶⁾ 知恵のある蛇が、永遠の生命を得ようとする人間を誘惑する存在として選ばれているのも肯ける。

「蛇は女に言った。」とあるが、蛇が何故、男でなく、女に先に声をかけたのか、その理由は一言も語られていない。女は誘惑に弱いからだとも言われていない。ただ、ここで思い出すべきことは、主なる神がエデンの園を設けて人をそこに住まわせ、そこを耕し、守るようになさせ、「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」と人に命じた時、人すなわち男は、まだ独りであり、パートナーである女は存在していなかった。だから、女は、神からの禁令を、直接自分の耳できいたのではない。男から聞いたのである。

「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」蛇の女への問いは、もってまわったような、まわりくどいものだが、実に巧妙なものだった。アダムは、神からはっきりと「善悪の知識の木からは決して食べてはならない。」「食べると必ず死んでしまう。」と告げられているから、このような形で男を誘うことは難しい。ところが、女は、男からどのようにきいたか、それを女がどのように理解したのか、二重の意味で、ずれが生じる可能性がある。そこを見抜いて、蛇は女にねらいを定めたのである。

女の答は、「園の中央に生えている木の果実⁽¹⁷⁾だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」であった。男が神の禁令を正しく伝えなかったのか、女が、男から伝えられた神の意図を正確に把握していなかったのかはわからない。しかし女の答は、深慮遠謀の蛇の思うつぼであった。

蛇は積極的に誘惑する。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知る者となることを神はご存じなのだ。」これを聞いて、女の気持ちはゆれ動き、判断に迷ったであろう。女は、食べるとすぐに死ぬとは思っていなかった。しかし、蛇は確信をもって、「死ぬことはない。」と言う。それどころか、「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ」と断言する。

女の目に、目の前の果実はいかにもおいしそうにみえた。神のように賢くなれるのであれば食べたいとも思った。女は、自分の感覚に忠実であり、決断力もあった。女は食べた。おいしかったのであろう。おいしいものは、愛する者にもわけたい。「一緒にいた男にも渡したので彼も食べた。」

男はその時、そこに一緒にいたのに、何故女を止めなかったのか、一言も語られていない。男は、食べるな。食べると死ぬ、と言われていたのに、女をいさめもせず、渡された果実を

女同様に食べたとある。

男は責任を果たさなかった。神からの禁令を誤りなく女に伝えたのかもしれない。しかし、女がそれを正しく理解していないことがわかれば、食べる前に女を制止し、あやまちを犯さないように防ぐ責任が男にはあった。

その夕べ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえた時、裸であることを恥じた二人は、園の木の間に隠れた。「取って食べるなど命じた木から食べたのか。」との問いに

「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取
って与えたので、食べました。」

主なる神は女に向かって言われた。

「何ということをしたのか。」

女は答えた。

「蛇がだましたので、食べてしまいました。」

男は、自分の責任を自覚しているどころか、神と女と両方に責任を転嫁している。⁽¹⁸⁾ 男は女に対して、「ついに、これこそわたしの骨の骨 私の肉の肉」と言った。それは二人の人格的な一体性を表わした言葉ではなかっただろうか。女の責任を、自分が引き受けるか、共に成るか、せめて半分は自分の責任であることを認めてもよいであろうに。

女は女でやはり、蛇に責任をなすりつけているが、「あなたがこの世にお造りになった蛇が、巧みにだましたので」と言わないだけ、男よりもむしろ潔い感じさえする。

禁令を与えられていたのに、それを自分から破ってしまったこの行為に対して、人間は、神から罰を与えられる。禁令を破った点で、男と女は共に責任があり、同罪である。しかし、どちらの責任が重いかと言えば、女よりは男なのではないだろうか。

この禁令への背きによって、人間は永遠の生命を求めることを拒否され、死ぬべき存在となった。「神のように善悪を知るもの」になることもできなかった。

では、「善悪を知る」とはいかなる意味であろうか。何が善で、何が悪であるか倫理的判断ができるようになったというのではない。善はおよそプラスなること、悪はおよそマイナスなるものを表わしている。生と死、健康と病気、多産と不妊など、天地に存在する、人間の力の及ばない事象全般をさしているものと考えられる。それは神の領域に属するもので、被造物は、その領域を犯してはならないのである。⁽¹⁹⁾

創世記にある二つの創造物語を読み解いてみると、二つの話に、相互に矛盾するところ、食い違いがあるのは確かであるが、男女の優劣については、神の前に男性と女性とは同等なものとして創造されたことがわかる。女性の創造がこれほどはっきりと書かれているのは、古代オリエントの世界では他に例をみないので、それをこそ評価すべきであろう。

第二創造物語の方がよく知られているのは、男のあばら骨からできた女の物語のほうが、

具体的で面白く、魅力的であったからであろう。教会の素朴な信者には、地上における両性の関係をこのように説明されると、わかりやすかったに違いない。第一テモテ書の記者の言ったように、イヴがアダムより劣った存在で、男は女に従属するべきだとする解釈が、正統的なユダヤ教とそれを受け継ぐキリスト教の神学で快く受け入れられてきたのは、その神学の担い手および教会の聖職者たちが、ほとんど男性であったからである。イヴは、宗教的にも、社会的にも、性的にも、アダムのコントロールの下にあるほうが都合がよかったからである。

近年、アメリカやヨーロッパを中心とした女性解放運動の中で、フェミニスト神学者たちが、従来の伝統的解釈に疑義を提出し、創世記のテキストに立ち戻って、聖書のメッセージを考え直そうとしたのは、全く当然なことであった。

三、時代と資料

第一創造物語が書かれたのは、紀元前六世紀頃で、イスラエルの民が失意のどん底にあった、バビロン捕囚の時代である。イスラエルは、ダビデ・ソロモン王国を絶頂として、以後北王国と南王国に分かれてしまったが、北はアッシリアに、南は新バビロニアによって滅ぼされ、南王国の主だった人々が大国新バビロニアの首都バビロンの郊外に連れ去られてしまった、それがバビロン捕囚の時代である。冒頭の宇宙を覆っている暗闇の深さは、その歴史状況の暗さの反映でもあろう。異境の地に連れ去られたイスラエルの民は、現実の混沌と暗闇の奥に、必ず神の現存と働きがあることを信じた。祭司資料の書き手は、宇宙を支配する唯一の神への信仰に立って、闇を光輝くものに変え、混沌を、命に満ちた調和ある世界へと生成する。そしてその頂点に、神にかたどられた、男女からなる人間が立ち、神にかわって、責任をもってこの地上を支配し、まとめていく。狭い民族主義的な次元を越えて、もっと普遍的な、人間一般についてのメッセージとなっている。

第一創造物語の祭司資料は、非常に発達した神学を背景にもっている。それは、整然とした、秩序正しい記述、全体の意図的な構成によくあらわれている。全体を貫いて、世界が「神のこぼれ」によって創造されたという信仰が、力強く告白されている。

第二創造物語は、それより四百年くらい古い資料に基いている。ダビデ王朝のはじまりの時代で、イスラエルの絶好調の時代でもあった。当時エジプト、メソポタミアの強国が弱体化したため、イスラエルの国土は拡大し、経済的にも繁栄した時代である。この時期に、人類が、神との関係を絶たれて、楽園を追われた話が書かれた意味はよくよく考えてみるに値する。人間は自由を与えられて、エデンの園の管理をまかされていた。園の中央にある禁断の木は、人間の自由が、無制限、無制約なものではないことを象徴している。禁令があることで、人間は神との関わりの中で自由に生きられる。神は人間に禁令を与えることで、人間との人格的な交わりをもつ。全き自由の中に、唯一つ禁止されていることがある。それは、神の領域に人間は立ち入ってはならないという制約である。制約があり、それを自由意志で

守ってこそ、人間の自由があるということを、ヤハウエ資料の書き手は語りたかったのである。書き手の心の中には、ダビデ王朝に対する強烈な批判があったのかもしれない。⁽²⁰⁾

創世記における二つの創造物語は、聖書が、ただ一つの解釈しか許さない書物ではないこと、きわめて具体的な時代や歴史の状況の中から生まれ、複数の資料をもち、多様な解釈を許す書物であることを物語っている。

註

- (1) J・A・フィリップ『イヴ／その理念の歴史』小池和子訳 勁草書房 1987 10-11ページ。
フィリップは言う。「イヴの物語は、ある意味で、西洋文明の女の概念の核心にある。創世記物語では、イヴは、エデンの園で演じられたドラマの最重要人物である。」「彼女の物語が…女についての西洋イデオロギーを形成している。神学のみならず、美術、文学、法律、社会慣習の中で、たえず作用をあらたにし、あらたに語られるこのテーマの展開をとおして、西洋世界での女の本性と運命があきらかになる。」
- (2) ハワ、エワという名は、創世記三章20節では、「生命あるもの」を意味するヘブライ語に関係づけられている。
- (3) 「婦人が教えたり、男の上に立ったりするのを、わたしは許しません。むしろ、静かにしているべきです。なぜならば、アダムが最初に造られ、それからエバが造られたからです。…しかし婦人は信仰と愛と清さを保ち続け、貞淑であるならば、子を産むことによって救われます。このことばは真実です。」(テモテ I、II 章 11～15 節) テモテ書の記者だけでなく当時の女性観を反映しているとみたほうがよいかもしれない。
- (4) 遠藤周作『聖書のなかの女性たち』講談社 1997 11-13ページ
- (5) 中世以降、マリアへの崇敬から、民衆の信心が生まれ、近代になって教会によって制定された祝祭日もある。マリアは生まれた時から無原罪であったとするカトリック教会の信心もその一つ。
- (6) J.G.Frazer Folk-Lore in the Old Testament, Macmillan and Co. 1923 1-2ページ
- (7) 創世記の一章～二章の創造物語は成立年代が異なる二つの資料に基づいて編集されたと想定する聖書学者は、それぞれの資料層に独自の名称をつけている。「祭司資料」の略号はP。祭司資料の記者は祭儀や祭司職に特別な関心を持ち、格式のある表現や定型化された語句を好んで使用している。
- (8) 「神」をヤーウエ、あるいはヤハウエとよんでいるところからきた命名。
祭司資料に基づく第一の創造物語とくらべると、第二創造物語は、ずっと生き生きとしており、素朴で、その文体も単純であり、祭儀や神学にはそれほど関心を示していない。神についての概念も、擬人的であり、土をこねたり、息を鼻に吹き入れたり、人のために衣をつくったり、人間のやるようなことをする方だと考えている。
- (9) 英語の休日 holiday の語源は聖なる日 holy day である。
- (10) この論文における聖書の引用はすべて『聖書 新共同訳旧約統編つき』日本聖書協会 1987による。
- (11) 創世記ならびに旧約聖書全般の読み方について、旧約聖書学者であり、「新共同訳聖書」の翻訳者の一人である太田道子氏から長年にわたり、御教示いただいたことを深謝する。
- (12) 神は唯一の存在であるが、何故ここで神が、「我々」という複数で表現されているかについては、諸説

ある。神の三位一体性、あるいは神の尊敬の複数形などであるが、神の熟慮と重大な決断の表現であるだろうとした次の解釈が妥当ではないだろうか。「元来は〈天上の宮廷における神々の議会〉と呼ばれる古代オリエン特世界共通の神話的表象を背景とした〈ヤハウエを中心とした天的存在の議会というイスラエルのイメージ〉に基づくもので、ここではそれを、祭司文書の伝承者が、「神の熟慮決断」として使ったのであろう。『新共同訳旧約聖書注解Ⅰ』日本基督教団出版局 1994 28ページ

- (13) 原初は、人間も動物も菜食であったという思想がみてとれる。神が、人間と動物たちのために、食物を与え、十分に備えられたので、生存のためには、たたかいや流血は考えられていない。人間は、自然と調和するように創られたので、もしその秩序を乱し、大地を破壊することがあれば、秩序を守って支配していくつとめを課せられた人間の責任は大きい。
- (14) 現に、英訳聖書 Revised Standard Version では、helper の語を使っている。
- (15) ヘブライ語の字義通りには、「彼の前にある存在として」「(彼に) ふさわしい、向かい合って、対応して」という意味。「助け」という語は、旧約聖書では助け主としての神をさすことが多い。「助け手」の意味を、女性が男性の「助手」や「補助的」役割をもつ存在として創造されたとする解釈は、テキスト全体からみて正確ではないと思われる。「助け合って生きる相手」「人を孤独から助けるのに最もふさわしいパートナー」という解釈をとりたい。『新共同訳旧約聖書注解Ⅰ』29-30ページ
- (16) 蛇は、脱皮することから、生命、再生、復活、生殖、青春回帰などの力をもつものとされ、あがめられも、おそれられもした。またその姿から、両性具有ともみなされた。古代のエジプトやメソポタミアの神話では、知恵をもつものとされた。一方で、呪いや、魔法、悪と結びつけて考えられることもあった。
- (17) この果実は、「りんご」だともおもわれている場合が多いが、聖書の記述には、「木の実」とあるだけで、何の果実とも特定されていない。ラテン語訳の旧約聖書で「悪」という単語が malus と訳された。malus はりんごを意味する言葉なので、西洋のキリスト教会ではりんごの木と解した。そのためキリスト教絵画の伝統でりんごとして描かれてきた。月本昭男『目で見える聖書の時代』日本基督教団出版局 1998 106ページ
- (18) この時の男は、a silent partner であり、女に対して、何の抵抗も疑問も示していない。男女は一心同体として存在しており、女を誘惑者とはみなせない、という見解が「聖書注解」にも示されている。The New Interpreter's Bible Vol. I Abingdon Press 1994. 361ページ
月本昭男氏も、「エデンの園の悲劇は、妻が蛇に欺かれたことでなく、その場に立ち会った夫のこの無感動、無行動から生まれたのである。」と評している。『創世記Ⅰ』リーフ・バイブル・コンメンタリーシリーズ 日本基督教団出版局 1996 106-108ページ
- (19) 「善悪を知る」とはどのような意味であるかは、多様な解釈がある。倫理的な判断ができるというだけでなく、人間が被造物の分を越えて神の領域を犯そうとしたことをさすという解釈がこの文脈では一番ふさわしいと判断する。
- (20) 木田献一『平和の黙示』新地書房 1991 136ページ 「王の墮罪」の項に、アダムの物語は、ダビデ王朝の批判のテキストであるとの指摘がある。

参考文献

- 遠藤周作『聖書のなかの女性たち』講談社 1979
絹川久子『聖書のフェミニズム』ヨルダン社 1987
鈴木佳秀『旧約聖書の女性たち』教文館 1993
木田献一『旧約聖書の中心』新教出版社 1989
木田献一『平和の黙示』新地書房 1991
キャロル・クライスト他『女性解放とキリスト教』新教出版社 1982
月本昭男『創世記 I』リーフ・バイブル・コンメンタリーシリーズ 日本基督教団出版局 1994
月本昭男『目で見る聖書の時代』日本基督教団出版局 1998
和田幹男『創世記を読む』筑摩書房 1990
ジョンA. フィリップス『イヴ／その理念の歴史』勁草書房 1987
『新共同訳旧約聖書注解 I』日本基督教団出版局 1994
The New Interpreter's Bible Abingdon Press 1994
J.G.Frazer Folk-Lore in the Old Testament, Macmillan and Co. 1923